23

明治初期における広島県立病院の役割と病院長たち

江川義雄

日本における医制が発布され、文部省統括の下に明治七年八月十八日には医育制度、衛生行政の方向性が確立されてくる。

広島地方では医師となる施設は明治十年に設立された広島県立病院に附属する広島医学校である。この学校運営の主体は広島県であって、初代校長は吉村寅太郎であった。吉村は医師でなく、学校創設前まで、外国語学校、広島県立中学校、師範学校長を兼任し、その後、仙台の二高、金沢の四高の校長をつとめた。医制第二十一条に公立病院長は医術開業免状を有しなければならないと明記されている。当時として開業免状を有する者は極めて少なく、県としては東大医科出身者を迎えた。東大医科第一回の卒業生は明治九年で、僅か三十一名の一名を迎えることになる。明治十年、同十一年には卒業生零で、同十二年に二十名という寥々たる存在であって、極めて稀少価値の人物で、地方に赴任することは破格の人事と評価され、有難られる所以でもある。

明治十一年三月十五日に初代病院長である須田哲造が赴任することになる。須田は嘉永元年、長野県の眼科医細井要人の三男で、叔父・須田経哲の養子となり、東大医科の前身東京医学校に入学し、在学中は第一等賞を受けたといわれる程の勤勉振りであった。卒後シュルツェ、スクリッパに師事し眼科を修めた。帰郷後、東大に復帰し、明治十五年に東大助教授となった。同十九年東京で開業し、明々堂と命名した。当時は医術開業免許受験生は多く、須田は最適の教育指導者でもあり、常時数十名の医生がいたといわれ、広島医学校出身者も須田を慕い上京する者も多かったし、患者からも尊敬された学者であった。日本眼科学会においても、最初のドイツ医学を受けた先覚者であって、数多くの著述と眼科医療器具を開発して、学会の発展に大きく寄与した。

明治十二年三月に広島県病院は新装改築して四月より

入院許可するに至り、病院も盛大となってくる。当時県病院の役割は医学校を包含し、他都市に比し広島の軍用基地に附属する軍病院など、現在の県病院経営規模を大きくこえて多忙であったことが想像される。県立病院長の存在期間は比較的短期であって、東大に帰学すれば、助教授に就任したり、やがて他大学の教授に昇進する程、県病院長は評価されていた。または、そのまま広島市で開業し、活躍する病院長も多く、その病院に勤務して、やがて独立名声を博する医員達も数多く見られた。

副院長としては、須田を補佐して、後藤静夫が就任している。後藤は世々藩医で、適塾出身者である。当地を代表格の医師として、長らく広島医会の功労者であった。診療係としては、初代の広島市長となった三木達、原田稔で、いずれも旧藩医である。

このような前代未聞の顔ぶれと近代的な公立病院の出現は当地方最初のことで、大変な賑わいを見せたのであった。

第二代病院長は明治十三年卒の伴野秀堅で、紀州出身で静岡に育っている。明治十三年には静岡病院で最初の解剖に立会し、弟の欣平は広島医学校に学んでいる。校長辞任後、海軍々医となり、佐世保海軍病院長となり、海軍々医大監で退役して、静岡県医学会創立の明治三十三年には名誉会員に推されている。

医学士の数少ない当時の日本であったから医学部教官から海軍々医に移るとか、また陸軍病院長の小山内建が広島医学校教頭を兼任する人事がみられる。特に軍事基地のある広島、呉では、その幹部に東大出身も多く、他の地域に比し特殊な条件、関係が認められる。

その後の広島県立病院長は佐野龍太郎、匹田復次郎、渡辺文治、澄川徳、吉村喜作、原田重雄、谷野数之と終戦時の石橋修三と継承されるが、それらの人物と業績は煙滅されているものが多い。

（日本医史学会広島支部）